

論文

試論 内集団・外集団研究の 社会学における今日的意義

川 上 代里子

Contemporary significance of in-group and out group research in sociology

KAWAKAMI Yoriko

はじめに

本論文のテーマは、社会学の内集団・外集団研究の今日的意義を探ることである。この研究については、個人的な印象ではあるが、最近ではどちらかというと心理学での論文が目立つように思われる。心理学では主に実験室内での集団の観察による分析が多いように見えるが、社会学ではこの概念は国家や地域、社会などの文脈に当てはめて考えられる。

社会学での内集団・外集団に関する古典的な研究としては、サムナーによる『フォークウェイズ』およびジンメルの研究をもとにしたコーサーの『社会闘争の機能』などの研究がある。本論文では、これらの業績は古典的ではあるが、今日先進各国で起こっている移民排斥や分裂の危機と呼ばれる現象を考えるうえで、未だ有益なものであると考える。

まず初めに、内集団・外集団という用語の意味を確認することから始めたい。

内集団・外集団とは

辞書的な定義をまとめると、内集団とは「ある個人がそこに所属し、帰属感や愛着心をもち、そこに所属する人々を『われわれ』として意識しうる集団」¹であり、社会的関係のなかで、「親族・隣人・取引などの関係を契機として献身や愛情の対象となる（中略）強い結びつきを持つ一群の人びと」²であるとされる。そしてこの「われわれ」という意識については、「われわれ意識」として用語になっている。「われわれ意識」は集団の成員が「自覚的に集団それ自体を一つの主体として意識するところに生ずる共有の感覚」³と定義されるが、これが主観的な感情体験とされるところに注意したい。

外集団については、所属していない、または「結びつきの弱い、あるいは競争・闘争などの対立関係にある『彼ら』『よその』としてとらえられる人びと」⁴「逆に違和感や敵意をもち、そこに所属する人々を『かれら』としてしか意識しえない」⁵人びとであるとされる。

論文の目的

本論文では、これら内集団・外集団の概念が、今日先進各国が直面している移民・難民の問題を考える手掛かりになるのではないかと考え、その可能性を探っていく。現在ヨーロッパおよびアメリカで起きている移民・難民をめぐる問題については、十分な研究のためには筆者の能力の問題があること、また時期的にも各分野の専門家による研究の成果をもう少し待ちたいところであるが、今回は非常に粗雑ながらも試論としてこれまでの研究の一部を検討していく。

先行研究において、内集団・外集団における「集団」は、戦争を国家という集団の対立として、また反ユダヤ主義やアメリカの黒人問題の事例ではユダヤ人や黒人を一つの集団として捉えられている。そのため、現在の移民の問題にこの概念を当てはめて考えることには、ある程度の妥当性があると言えるだろう。しかし、本論文が主に取り上げるコーザーの『社会闘争の機能』は1956年の著作であり、その後様々な状況が大きく変化したと言える。ここで変化のうちの一つとして、グローバリゼーションを挙げたい。詳細は後述するが、グローバリゼーションが世界に与えた影響の大きさはいうまでもない。大きさのみならず、その種類も多様なものであるが、ここで挙げたいのは、多くの社会の人口の構成や質に与えた影響である。本論文では、にもかかわらずコーザーの理論が分析に有効であるということと、またグローバリゼーション後の状況の変化、つまり理論との「ずれ」が、示唆するものが大きいと考える。そこで、コーザーの議論を検討していくが、その前にコーザーの理論が土台としているジンメルの理論について確認していきたい。

ジンメルの社会学

コーザーの『社会闘争の機能』は基本的にジンメルの理論、特に「闘争」の理論を下敷きに議論をすすめている。そこではジンメルの闘争の論議を、あえて闘争の社会的な機能＝効用に絞って16の命題に整理し、再解釈している。そこでまず、ジンメルの社会学、および闘争の理論について簡単に述べていく。

ジンメルは、いうまでもなく、デュルケム、ウェーバーと共に社会学が独立した学問として成り立つことに貢献した社会学の黎明期の最も重要な人物のうちの一人である。社会学とは何か、社会学とはどういう学問か、という問いには、現在でも答えるのが難しいといわれている。社会学は、その歴史の初めから、哲学、心理学や他の学問とは異なる独自の学問であ

ろうとして、それを模索してきた。またそれとともに、社会とは何かという問題についても議論が重ねられた。

初期のものとしては、社会唯名論対社会实在論の論争が挙げられる。この論争は、社会とは何か、がテーマとなっている。社会唯名論は、社会とは個々人の集合にすぎず、実在するのは個人だけと主張した。社会实在論は、社会はそれを構成する個人に還元できないものであり、個人を超えた一つの実在だと主張した。ジンメルは、そのどちらの立場も批判し、相互作用に注目した。(社会的)相互作用とは、「複数の主体のあいだで影響や効果を及ぼしあい、お互いの行為が、それぞれ原因かつ結果となっているような社会関係のありかた」⁶と定義される。つまり、(社会的)相互作用とは、社会において人と人とかかわり合い、お互いに影響を及ぼしあっている、人と人とのつながりのことである。

ジンメルは、社会を社会たらしめるものは、諸個人の相互作用であるとした。人と人とかかわり合うことによって社会は形成される。無数の相互作用の反復が社会という客観的な構成体を構成しているというのである。ジンメルは相互作用を糸に例え、社会を相互作用の糸によって織りあげられた布、そして個人を社会的な糸がたがいに結び合う場所(結び目)に例えた。そしてこの相互作用による社会の形成過程を「社会化」と呼んだ。

ジンメルの社会学は形式社会学と呼ばれるが、それはジンメルがこの社会化の「形式」を問題としたからである。ジンメルは、社会化を二つの観点から考えた。一つは社会化の内容で、これは相互作用の目的や関心をさす。例えば経済的利害、政治目的、宗教心などである。もう一つは社会化の形式で、これは相互作用の仕方をさす。たとえば、上下関係とか競争、派閥と言ったものである。これらの形式は、政治、経済、教育、宗教などどの領域(内容)にも存在する。ジンメルは、他の社会科学に対する社会学の独自性を考えるうえで、重要なのは客体(何を研究対象とするか)ではなく、考察方法であるとした。ジンメルは、どの領域にも存在する人間関係のありよう、すなわち形式を社会学独自の対象と考えたのである⁷。

社会学における「闘争」について

そして闘争は、この形式の一つである。社会学のコンフリクトの研究自体はもう少し範囲の広いものであり、日本語にはその文脈によって競争、抗争、闘争など様々に訳される。この分野の研究としては、階級闘争などの方がよりなじみのあるものかもしれない。

新陸人は抗争（闘争）の研究を、自然主義と歴史主義の対立を横軸に、抗争が集団単位か個人単位かを縦軸にして「ナチュラリズム抗争論」「弁証法的抗争論」「過程論的抗争論」に分類した。そして「過程論的抗争論」を、社会過程とは時系列にそった相互行為（相互作用）の複合的展開の様相を指すものであるとして、社会過程の分析を中心に、人々の相互関係の多様性や社会的協働組織の形成過程へと展望を拡大する研究であるとした。ジンメルの抗争（闘争）は、この「過程論的抗争論」に分類されている（ちなみに、先述のサムナー『フォークウェイズ』はスペンサーの社会進化論の流れをくむことから、ナチュラリズム抗争論に分類される）⁸。

ジンメルの闘争

闘争という言葉からは、何か好ましくないことという印象を受けるかもしれないが、ジンメルは、必ずしもそうとらえてはいない⁹。奥村隆は、社会学の歴史のなかでジンメルを紹介するうえで、その哲学者としての側面にも注目する。ジンメルは「外界の事物の形象は、私たちには両義性を帯びて見える。つまり自然界では、すべてのものが互いに結合しているとも、また分離しているとも見なしうるということだ」¹⁰と述べている。奥村は、多くの人間が「分離」がある＝「結合」していない、「結合」がある＝「分離」していないと考えるところを、ジンメルは、いつも「分離」と「結合」を同時に発見するとする。例えば『橋』は、岸と岸という『結合意志』に抵抗する地形を結びつけ、同時に両岸のあいだの距離をい

やおうなく思い知らせます」¹¹ という具合にである。このように考えるジンメルは、闘争にもプラスの機能を見出す。ジンメルは「宇宙がひとつの形式を持つためには『愛情と憎悪』、牽引力と反発力を必要とするように、社会もまた一定の形式に達するためには、調和と不調和、結合と競争、好意と悪意のなにほどこかの量的な割合を必要とする」¹² として、社会化のためには闘争はむしろ必要であると考えた。家族を例として、夫婦にとって「ある程度の軋轢、内面的な離反や外面的な口論は、夫婦の紐帯を最終的に結びつけている一切のものと有機的に結合しており、けっして社会的な形象の統一から切りはなすことができない」¹³ と述べている。

闘争に関する研究はジンメル以後も続いていくが、コーザーはパーソンズらの研究が社会構造の（改革よりも）維持を保証することに関心を向け、闘争の分析を「緊張」「ストレイン」などに置き換えて社会構造の病気のようなものとして捉えることを批判している。コーザーは、研究の目的を、パーソンズらによって無視された闘争のポジティブな側面をもう一度取り上げることとしている。

コーザーの『社会闘争の機能』の今日的意義

以上のようなジンメルの闘争論に基づき、先述のようにコーザーは、ジンメルの闘争の論議を、あえて闘争の社会的な機能＝効用に絞って 16 の命題に整理し、再解釈した。繰り返しになるが、本論文ではこの 16 の命題を概観し、今日の状況への適応可能性について考察する。

今日的状況を引き起こした原因の一つとして、先述でグローバリゼーションを挙げたが、ヘルドはグローバリゼーションの定義として、次の四つを挙げている。1. 社会的諸関係の拡張、2. フロー（コミュニケーションネットワーク）の強化、3. 相互浸透の深化、4. グローバルなインフラストラクチャ（情報コミュニケーション、交通技術の進化、市場の拡大、国家の様々な政策などの制度のグローバリゼーション）である。現在の移民・難

民問題については、特に欧州では戦後の大量移民受入がその根源の一つになっている。グローバリゼーションは、先進諸国の移民（不法なものも含めて）の増加という現象を促進し、また様々な影響を与えた。

コーサー自身が、アメリカ国内の黒人問題や反ユダヤ主義などの問題を語るときに、これらの人々を内集団・外集団として論じているように、これら移民を内集団・外集団として考えることが妥当と思われるということはすでに述べた。そしてグローバリゼーションという文脈を加味してこのことを考える時、次のような事例が考えられる。

われわれ意識の定義からもわかるように、内集団・外集団は、個人による集団の主観的区別の問題であるとされている。客観的な区分ではなく、成員の意識の問題であるということは、状況次第でその境界は変化するといえる。オーストラリアを例にとると、オーストラリア社会は白豪主義政策により、その社会の人口構成のほとんどをイギリスからの移民で占めていた。そして戦後の大量移民計画により、東欧系の増加を皮切りに、中東やアジアなど様々な人々の住む社会となった。しかし、白豪主義時代に、そのルーツに基づく集団間の対立関係、内集団・外集団が存在しなかったかといえば、そうではない。同じイギリスからの移民であっても、アイルランド系はカソリック教徒として、他のイギリス系からいわば「われわれ」とは見なされていないところがあった。しかし、戦後のオーストラリア社会の多様化にともない、アングロ・ケルティックという言葉が生まれ、そこにアイルランド系が含まれたことからわかるように、アイルランド系の人々も「われわれ」の中に組み入れられるようになった。

以上のように、闘争と内集団・外集団の概念は、それを直接適用可能な場合やそうでない場合にも一定の示唆を含んでいると思われる。次項では、コーサーの命題を概観し、論点を絞って分析していきたい。

社会闘争の機能の 16 の命題

コーザーの挙げた命題は以下のとおりである。

命題 1：闘争が集団を結束させる機能

命題 2：闘争が集団を維持させる機能と安全弁制度の重要性

命題 3：現実的闘争と非現実的闘争

命題 4：闘争と憎悪衝動

命題 5：密接な社会関係における憎愛

命題 6：社会関係が密接になるほど葛藤の強度が高まる

命題 7：集団構造の内部にたいして闘争が持つ影響と機能

命題 8：関係の安定性を示す指標としての闘争

命題 9：外集団との闘争は集団凝集性を強める

命題 10：他集団との闘争は集団構造を明確なものにし、それゆえ内部闘争への反応を規定する

命題 11：敵の探索

命題 12：イデオロギーと闘争

命題 13：闘争は敵対者を結束させる

命題 14：敵を統合することによる利害関係

命題 15：闘争は力の均衡を樹立し維持する

命題 16：闘争は結社や連盟を生みだす

以上の命題のうちのなかで、いくつかのキーワードおよびテーマと言えるものを三つ挙げ、検証していきたい。1) 憎悪と敵意、2) 集団の凝集性、3) 統一をもたらす機能、である。

憎悪と敵意

闘争が憎悪や敵意をともしなうことは、容易に想像がつくであろう。しかし、コーザーは単に憎悪や敵意があるから闘争が起る、または闘争が憎悪

や敵意を生み出すと述べているわけではない。この憎悪と敵意については、二つの興味深い点がある。

第一には、闘争を敵意や憎悪のはけ口であるとみなす考え方である。コーザーは、闘争は「通常の社会的脈絡ではタブーとされている攻撃的衝動を『安全』に解消するための一般的手段として大衆文化の機能」¹⁴を持つとし、またスケープゴートづくりによって「敵意に通路を与え、もともとの対象に向けて敵意の放出されるのを阻止するために役立つ制度」¹⁵が社会制度の構造を維持すると述べている。

さらにコーザーは闘争を、現実的闘争と非現実的闘争に分類しており、前者は手段としての闘争であり、何らかの要求や欲求が阻害される場合に、それを具現しようという手段として行われる。後者は、闘争そのものを目的とする闘争であり、敵対する人々の少なくとも一方の（心理的な）緊張緩和のために行われる。そして、闘争の結果ではなく闘争そのものによって充足が得られる。コーザーは、後者をすりかえられた対象に向けられた攻撃的行為と呼ぶ。

コーザーは、闘争の上記の機能を欲求不満の解消として全体的にポジティブに述べている。しかし彼自身も「社会構造あるいは行為者のいずれかにたいして、またその両者にたいして、深刻な逆機能をもつかもしいない」¹⁶という懸念を表明しているように、今日ではむしろ危険な側面と評価すべきではないだろうか。

近年、ヨーロッパやまたアメリカでも、政治家による移民のスケープゴート化が目立って行われているように思われる。そして実際にフランスのル・ペン党首率いる国民戦線が一定の支持を得ていること、またアメリカのトランプ大統領は、メキシコからの不法移民をたたくことで人気を得ているところがある。このスケープゴート化がある種の政治家にとって選挙の際に票になるという事実により、メディア上で公然とこれが行われ、社会的に敵意が増幅される結果となった時、「すりかえられた対象」である移民に与えられる負の影響は大変大きなものになる。そして、これをいか

に回避するかは移民らの努力のみでは難しい。

第二の興味深い点は、同じ集団内で密接な関係になる程、闘争が起った際には憎悪が強くなるという点である。まったく関係のない、かかわりを持たない人々については、人は客観的に対処し、憎しみをもたないという。これは内集団内部の闘争についての言及であり、通常の人間関係を顧みても親密な人間に裏切られた場合の怒りはより大きくなることから考えても、容易に想像がつく。特に注目すべき点には見えないかもしれないが、これを今日の状況に当てはめると少し状況が違ってくる。

先述のヘルドのグローバリゼーションの四つの定義を思い出してほしい。これを人間の移動に当てはめれば、国境を越えた人間の移動により、人々の関係も国境を越え拡張する。人的ネットワークは国境を越え拡大し、その結びつきは相互に深化する。そのことは、国内の様々な制度にも影響を及ぼす。他国から来た国境を越えた移民が国内で一つの集団を作り、上記の環境の中で母国とも密接な関係を保ち続けている。グローバリゼーションは、移民した後も、彼らに意識や様々な意味で母国とのつながりを強いまま維持させると言われている。

これまで、内集団・外集団の問題を移民に当てはめて考える時、時には移民対受入社会という二つの集団として彼らを内集団・外集団としてとらえ（内集団・外集団は「われわれ」という主観的な意識の問題なので、どちらを内集団とするかは、その立場によって異なる）、また時には一つの（国家）社会を内集団としてとらえることもしてきた。しかし、移民集団が国境を越えていわば乗り入れるかたちで移住し、母国とのつながりが以前よりも強いままにいるという場合、それを一つの集団として捉えることが難しくなるのではないだろうか。

移民であっても、一つの社会でともに暮らす場合、彼らとのコンフリクトは内集団内の闘争と捉えられる。しかし移民が同じ内集団の成員という性質を持ちつつも、ある意味で外集団としての他者としての意識を持ち続ける存在であるとすれば、彼らに対する憎悪はより強くなると推測される。

集団の凝集性

集団の凝集性とは、集団成員を集団に引き留める力の程度のことである。コーザーは、(外集団との) 闘争は、(内) 集団を結束させる機能をもつと述べている。外集団を集団にとっての共通の敵と考えれば、成員が結束するのは想像できるだろう。

ここで注目したいのは、コーザーは、対外的闘争が集団の凝集性を増大させるがゆえに、「集団の凝集性を維持し強化する手助けとして、事実上、敵を『誘発』こともある」¹⁷そして、「内集団の凝集性を促進するためには、対外的闘争が何も客観的に実在している必要はない」¹⁸と述べている点である。そしてこれは、敵の存在がなくなれば内集団の解散の危機となり、新たな敵を模索しなければならないという、危険な構造であるとしている。

この敵の探索は、内集団の外部のみならず内部の反対分子も含まれる。これは先述の、移民のスケープゴート化に当てはめることができるだろう。アメリカではトランプ大統領が不法移民を強制送還の対象とすると主張している。この政策の妥当性は議論の余地があるだろうが、それ以前にもしこの現象が敵の探索であるのであれば、すべての不法移民が送還されたとしても、次の排斥の対象が生み出されることになるのではないだろうか。

統一をもたらす機能

コーザーおよびそのもととなるジンメルは、闘争をポジティブなものとして捉えている。闘争が社会の統一をもたらす可能性はあるのだろうか。

コーザーは、「憎悪の相互行為は、このように、しばしばその後の親しい相互行為に結びつく」¹⁹として、喧嘩した後の子供達は仲の良い遊び友達になりうるとしている。また、歴史上、戦争が、それまでは関係のなかった文化を相互に混交させて、豊かなものにしてきたとも述べている。コーザーは闘争を接触の機会と捉え、闘争という行為がそれまで何の関係も

なく存在していた当事者を結びつけ、以前には全く存在しなかったかもしれない関係を確立すると考える。

これは、移民をめぐる問題に適用可能だろうか。移民をめぐる問題を考える時、受入社会及び移民の双方が、お互いに対する理解を深める努力が必要となる。もちろん局所的にそれらの努力がないわけではないが、社会全体としてそれを行う傾向はあまり見られないように思われる。これには、教育制度の改革などに関連したコストなど様々な問題があるが、ここで筆者が主張したいのは、この問題の解決には受入社会及び移民のどちらか一方ではなく、双方の努力が必要であるという点である。

内集団・外集団研究のもう一つの基本文献である『フォークウェイズ』のなかで、サムナーは「民族中心主義」について「おのおのの集団は、自分自身の自尊心や自負をいただき、自己をすぐれたものとして誇り、それ自身の神性を賞揚し、よそものを軽蔑のまなこでもってながめる」²⁰と述べている。民族中心主義は、主に白人の側のそれが指摘されてきたが、サムナーはトゥピ族やパプアニューギニアの例を用いてこれを説明しており、どの民族集団も共有する傾向であるといえる。移民の問題は主に受入社会側に努力や対策が求められ、それらに妥当性はあるものの、移民の側にも移住先の社会に対する理解を深める努力が求められても良いのではないだろうか。

結び

以上はなほだ粗雑ではあるが、コーザーの理論をもとに、試論として近年の移民をめぐる問題の分析を行ってきた。今後研究を深めるためには、対象地域の設定や現状の調査、先行研究のその後の展開などが必要となってくるが、それらは今後の課題としたい。

- 1 「内集団／外集団」森岡清美ら編『新社会学事典』有斐閣 1993 年
- 2 「内集団／外集団」濱嶋朗ら編『社会学小辞典 [新版増補版]』有斐閣 1997 年
- 3 「われわれ意識」同上
- 4 「内集団／外集団」同上
- 5 「内集団／外集団」森岡清美ら編前掲書
- 6 「社会的相互作用」濱嶋朗ら編前掲書
- 7 杉本学『『社会学』—社会的アイディアの宝庫』早川洋行ら編『ジンメル社会学を学ぶ人のために』世界思想社 2008 年、ジンメル『社会学』白水社 1994 年
- 8 新陸人「抗争理論」安田三郎ら編著『社会過程 基礎社会学第Ⅱ巻』東洋経済新報社 1981 年
- 9 ジンメル 1994 年前掲書
- 10 ジンメル「橋と扉」『ジンメル・コレクション』筑摩書房 (kindle 版) 2003 年、776/3307
- 11 奥村隆『社会学の歴史Ⅰ』有斐閣 2014 年、p.124
- 12 ジンメル 1994 年前掲書、p.264
- 13 ジンメル『闘争の社会学』法律文化社 1966 年、pp.7-8
- 14 コーザー『社会闘争の機能』新曜社 1978 年、p.48
- 15 同上、p.49
- 16 同上、p.49
- 17 同上、p.140
- 18 同上、pp.140-141
- 19 同上、p.168
- 20 サムナー『フォークウェイズ』青木出版 1975 年、p.21

引用・参考文献

- 新陸人「抗争理論」安田三郎ら編著『社会過程 基礎社会学第Ⅱ巻』東洋経済新報社 1981 年
- 奥村隆『社会学の歴史Ⅰ』有斐閣 2014 年
- 小井土彰宏「岐路に立つアメリカ合衆国の移民政策」駒井洋監修『移民政策の国際比較』明石書店 2003 年
- コーザー『社会闘争の機能』新曜社 1978 年
- サムナー『フォークウェイズ』青木出版 1975 年
- ジンメル『社会学』白水社 1994 年
- 『闘争の社会学』法律文化社 1966 年
- 「橋と扉」『ジンメル・コレクション』筑摩書房 (kindle 版) 2003 年
- 杉本学『『社会学』—社会的アイディアの宝庫』早川洋行ら編『ジンメル社会学を学ぶ人のために』世界思想社 2008 年
- ヘルド,D.編『グローバル化とは何か』法律文化社、2002 年

(本学経営学部講師)